セクト主義に対する闘争強化のために
六月九日付　中央政治局声明に反対する　（上）

中央政治局員　西　京司
同　岡谷　進
同　香山　久
関西地方委員会　杉本喜信
書記長

一九六九年六月二五日

「沖縄奪還大教祖全員集会における反戦諸組織の行動のついて」と題する関西地方委員会書記局の声明をわれわれは基本的に支持し、これを撤回せよという中央政治局の声明に反対する。

（一）

中央政治局の声明は、第一に生じた事件の本質とその焦点を理解していない。第二に、事件への参加者に対する革命党としての自己の政治的責任を理解していない。

問題の本質は五月三十一日の事件において、個々のどのような挑発が行われた高校生が、どのように乗せられるかに酔って筝が余計に拡大されたかという、細目の問題ではない。筝の本質は今日の左翼の運動、特に学生運動におけるいわゆる旧三派と革マルによって代表される極左急進主義的、最後通牒的傾向が重大な危険と運動の堕落をもたらしており、今やそれが革命と労働運動に対する一つの重大な危険となりつつあるという徴候を明瞭に示したことである。そしてまたこの極左セクト主義的急進主義に対し、わが同盟自体が全体として正しく対処しえず、それに引きずられてきたということをはっきりと認識せねばならない。

わが同盟の極左急進主義への屈服の傾向、急進主義学生の自然発生的運動への追随の傾向は、たとえば最近の同盟中央機関紙「世界革命」の諸論文を見るだけで明白である。国際主義高校戦線の諸君はただこのような極左セクト的方針の結果が何をもたらしえるかを

示したのである。

この意味において、今五月三一日の事件に際して第一に指摘されるべきことは、今日までなお余りにも不充分な小ブルジョワ急進主義やセクト主義に対する闘争の問題であり、同盟自身の問題である。これが決定的に重要な点である。しかるに中央政治局声明（政治局多数派による声明）は民同およびスターリニストに対する批判でもって、自己の政治的責任を頬かぶりしている。

大教組指導部に対する批判、それはもちろんくり返し必要であり、また運動において直接関係する同志諸君が行って来たことでもある。そしてもちろんわれわれも必要において今後もくり返し行っていかねばならないであろう。中央政治局声明の大教組批判は、それがふさわしい場所において、ふさわしい比重をもってなされているのではないという点をのぞいてわれわれもまた同意し得る。だがそのことが問題になっている事態を少しでも変えるであろうか？

ここで官僚的指導部と大衆の関係の問題と、全体としての労働組合の組織および集会の評価の問題とを混同し、すりかえることは絶対に許されない。

はっきりさせておこう、たとえ大教組の指導部がスターリニストによって握られていようと、さらには民社勢力によって握られていようと、ここでの問題の本質には変わりはない。

高校生が教祖の「沖縄奪還集会」に連帯を表明しに出かけること、これは全く立派なことである。高校生の中には明らかにこのような立派な意図をもって参加したものがあったことをわれわれは疑わない。しかしまた明白に「教師は敵だ」とか「このような集会は粉砕に値する」との煽動（しかもトロツキストと称するものの中から）があったことも明白である。そして正当な高校生の連帯の意思表示に対し、大教組の側から挑発があって事件が起こったのか？しかし中央政治局（多数派）の声明自身が、そうでないことを示している。すなわち、声明によれば、大教組の指導部が不当な官僚的やり方で集会を組織したという事実の上に、「高校生がおしかける以外になかったことはいうまでもない」というのである。まさしくここにこそ事件において現れた危険な傾向は声明によって一層明白に示されているのである。

すなわち、大教組は官僚指導部が支配しているから、その集会に急進的高校生がおしよせて衝突することは何も悪くないという論理である。この論理こそ、ブルジョワジーとプロレタリアートの階級闘争を忘れ去った極めて危険なセクト主義を明白に示すものであ

る。

われわれマルクス主義者にとって闘争の基準はまず第一に階級闘争であり、現実に存在し行動する諸勢力と大衆行動を評価する基準は第一にその階級的性格である。マルクス主義の革命的党派はこのプロレタリア階級の歴史的利益を徹頭徹尾つらぬく立場に立たねばならない。他の中間的党派との党派闘争は、ただブルジョワ階級への屈服の道を歩むものや、プロレタリア階級内部を分裂に導くものに対する革命党の原則的立場に立った闘争に他ならない。

民同やスターリニストとの闘争は、少なくとも今日かれらがブルジョワ支配階級に対立する労働大衆の中に一定の、しかも現在ではなお大きい支持をもっている限り、これに対して「おしかけ」たり突撃したりすることによって勝利しえないことは明白である。かれが労働者大衆に影響をもっているかぎり、われわれの任務は幾多の戦術的形態をとるとしても、その基本的任務はかれらの影響下の大衆をわれわれの側に獲得すること、かれらから大衆的支持基盤をうばいとることである。

若い高校生諸君が教師への不満をただ直接行動で表そうとすることは理解できる。しかしそれに対し「教師は敵だ、というスローガンこそもっとも革命的だ」などと煽動し（一体ぜ革命的なのか？！）衝突を促すことにどんな革命的指導があるというのか？そしてこの誤った小ブル急進主義的先導が自己の影響下において行われているという危険な事実に眼をつぶる多数派の声明は、革命党としての責任を全くわきまえないものではなかろうか？！

（二）

今日の資本主義支配の中で、大学や高校の教師が日々革命的教育を学生・生徒に与えているなどということはありえないであろう。（もちろん教育そのものは決して単なる政治イデオロギーの教育の問題ではない。数学や自然科学の教育を考えるだけでもそれは明白だ。しかしこの問題はここでは論じないでおこう。）ここからして学生・高校生の中に生ずる現実の教育に対する不満が爆発する時、われわれはその中で正しい方向を求め、それに対し労働者階級の側にこれをひきつけるための指導を与えねばならない。ブルジョワ社会の矛盾が教育の場において高校生に伝えられる時、高校生の自然発生的反応が、矛盾を伝える教師の部分に向けられることは当然重文あり得ることである。しかしわれわれがそれら高校生に与えるべき指導は、闘争の中で今日のブルジョワ社会の矛盾の本質を暴露し、その闘争を労働者階級の側に立って階級的にむけることである。一般的に「教師は敵だ」

というような追随主義的な顫動を行って高校生の頭を混乱させることでは断じてない。まして教職員組合の闘争を敵視するようなことは問題にならない。

端的な例をひこう。沖縄軍労の労働者は明らかに日常、沖縄の米軍基地で働くことによって、その意味でベトナムを侵略する米軍に協力している。燃しベトナム解放戦線の戦士たちが沖縄の米軍基地への突入を試み、その際個々の基地労働者との衝突を余儀なくされたとしても、われわれわは当然ベトナム戦士を擁護しなければならない(戦術の正否は別)。しかし今日の情勢において、軍労の人々が日常米軍基地で働くことを止めていないという理由でもって、軍労組の賃上げ闘争の集会を敵視するとしたら、これは最悪のセクト主義であり、闘争の破壊行為であることを説明する必要があるだろうか。ベトナムの戦士はもとより決してそんなことをしないであろう。この場合、沖縄軍労の指導部が社会大衆党によって握られていることが問題の本質を少しも変えないことは明かである。

元来資本主義社会を支えているものは労働者の労働である。この労働者がそのことを自覚し、自ら社会を支配しようとして立ち上がる時、社会主義革命は現実に転化するのであって、労働者が日常現体制を支えているという理由をもって、かれらの自主的な運動や組織(たとえその指導部に問題があろうとも)に敵対するとしたら、それはいうまでもなく、革命の発展に対して破壊的影響を及ぼすものである。

(三)

中央政治局声明はいう。

「…同盟関西地方委員会書記局声明は、高校生活動家たちが政治的に代表しているものと、他方民同官僚と共産党の官僚的統制下に組織されたこの沖縄集会が代表しているものとを単に並列においており、この二つの間にある重大な政治的かつ歴史的対立について全く無自覚である。前記声明の致命的誤りはここにある。

今日の大学闘争一般、そして高校生大衆が今や参加しつつある闘争が既存のブルジョワ的管理と統制の秩序そのものに対する叛乱として闘争を形成しつつあるとき、つまり伝統的ブルジョワ社会と国家の強権的秩序および改良主義的支配の均衡そのものを部分的かつ過渡的に崩壊させ始めているとき、この闘争を伝統的な改良主義運動と並列して論ずることは絶対にできない。」

一体中央政治局多数派は何を言いたいのか。学生の叛乱と改良主義運動なるものとの間の深淵を指摘することによって、問題はどのように結論されるか?要するに叛乱高校生の行動をいずれにせよ擁護せめばならない、というのである。

たしかに今日の青年学生の叛乱は、ブルジョワ支配が生み出した腐朽に対する不満の爆発であり、この学生らの急進的闘争となお全体として伝統的指導部の支配下におかれている労働者の運動との間には大きな裂け目が存在している。（だがここで歴史的対立という言葉を軽々しく弄ぶことは危険であるる。）この現実に対し、われわれは主として青年労働者の活動を通じて結合をもとる、伝統的労働運動指導部の支配を覆そうと努力しており。他方それを阻碍する小ブルジョワ急進主義のセクト的方針とたたかわねばならないと考えている。しかるに政治局声明は、この両者を「並列して論ずることは絶対にできない」ということによって、いかなる結果におちいるか？

つまり両者がぶつかった時には、どんな形態であれ常に学生の側を支持せねばならないということになるのであろうか？

もっとも重大なことは、こういうことによって政治局多数派は、明らかに少なくとも改良主義者やスターリニストに対しては、労働者民主主義を拒否することを声明したということである。関西の声明はまさしくこういう主張に対する批判と、中央政治局の多数派さえがそうした誤りに陥った同盟内の現状に対する自己批判なのである。

注1　中央政治局の要請により、ここに掲載された論文は杉本の責任において原文の約一割を削除したものである。なお全文は別途公表する予定である。（署名者）

注2　ここに掲載された論文は声明の一部である。残りの部分については追って公表する。

セクト主義に対する闘争強化のために
六月九日付 中央政治局声明に反対する（下）

中央政治局員　西　京司
同　岡谷　進
同　香山　久
関西地方委員会　杉本喜信
書記長

一九六九年六月二五日

（三、承前）

階級闘争において、ブルジョワジーの暴力とプロレタリアートの暴力とを同列に論ずることは絶対にできない。ブルジョワジーとプロレタリアートの両者に通ずる民主主義とか平等とかは、実際にはブルジョワ民主主義の欺瞞に他ならない。なぜなら階級差別はすでに経済的土台から形成されており、平等の権利などを行使しうる経済的保障はプロレタリアートには最初から存在しないからである。搾取されているものが搾取者の抑圧に対して力をもって抵抗することと、搾取者のこれに対する力の行使とを、単なる暴力という同じ基準で論ずることは絶対に許されない。

しかし労働運動内部の諸潮流の闘争においては問題は原則的に異なる。ここでわれわれは断乎たる労働者民主主義の擁護者でなければならない。もちろん労働運動内の諸潮流の対立は、主としてブルジョワジーの影響下にもたらされ、階級対立と無関係ではあり得ない。これを完全に切り離すことは不可能である。（更に労働者国家において官僚が権力を簒奪した結果、問題は一層複雑化している。）しかしだからといってこの両者を原則的に区別し得ないものは、階級闘争の力学を理解しないものであり、マルクス主義の階級的立場と弁証法を何一つ理解しないものである。（「プロレタリアート 三五号」E・マンデル論文参照）

ふたたびくり返す、マルクス主義者は闘争における基本的対立の基準をまず第一に階級的対立におく。資本主義のしたにける敵と味方の対立の基本線はブルジョワジーとプロレタリアートとの階級的対立にあり中間の諸階級、諸階層はそのいずれの側に結集されるかという点において評価される。トロツキストの改良主義者やスターリニストに対する闘争も決してこの基準から離れるものではない。しかるにセクト主義者はこの階級闘争の基準から離れて、別のところに線をひこうとするのである。

政治局声明は「大学闘争一般、そして今や高校生が参加しつつある闘争が……伝統的なブルジョワ社会と国家の強権的秩序およびその均衡そのものを部分的かつ過渡的（？）に崩壊させはじめている」という。この言葉はやや理解しにくいが「国家の強権的秩序および改良主義的支配の均衡そのものを……」という時、この「改良主義的支配」とは、主として改良主義指導部を通じて行われるブルジョワジーの支配をさすものである。この強健と改良主義の両方を通ずるブルジョワジーの支配そのものを革命は打倒せねばならないことは明白である。だがこう主張することは、まだこれをいかにして打倒するかについて何事も語ってはいない。

国家権力による直接の抑圧と改良主義を通じて、すなわちプロレタリアートの自覚を妨げる道を通じてする支配とは、いずれも結局においてブルジョワ支配の形態であるが、この両者に対して同様の手段をもつて、ただこれとの直接的衝突をもって解決し得ると考えることは全く誤っている。もしこの両者の間に明白な差異を認めないとしたら、もし改良主義者がブルジョワ国家の直接の権力機構（もつとも国家もまた決してむき出しのブルジョワ支配の形体をとるわけではないが）と同じように行動するとしたら、改良主義はブルジョワジーにとって何の役にも立たないであろうし、またこれは何ら改良主義でもないであろう。ファシズムと社会民主主義がいずれもブルジョワジーに奉仕するという理由をもって両者を十把一絡げにし、両者の間の決定的差異（生死にかかわる対立）を無視し社会民主主義をファシズムとよんで、両者への同様の対決を主張したのが一九三〇年代ドイツにおいてヒトラー擡頭の前にプロレタリアートを分裂させ武装解除したかの悪名高いスターリンの「社会ファシズム論」であった。（もちろんブルジョワ国家の強権とファシズムは異なる。改良主義は前者と十分共存している。しかしこの両者に対する闘争における差異は依然として重要である。）

しかるに今や、わが同盟をも含む急進諸派は、このスターリンと同様のセクト的最後通牒主義に落ち込もうとしているのである。それは、今日の大学闘争における青年学生の

闘争と、なお伝統的指導部の下にある旧来の労働組合その他の運動との差異を「重大な政治的かつ歴史的対立」として強調し、あるいは旧い「体制」に対する叛乱「反体制」といい、あるいは“戦後民主主義の否定”と称し、ある時は“ブルジョワ国家権力と改良主義支配の均衡またはブロック全体をくつがえす”ということによって、自己と現実に存在する旧来の労働運動との間に線をひき、そのことによって労働運動との結合を自ら妨げたり、労働者の統一戦線の発展を妨げたりするセクト主義へと落ち込んでいるのである。

本来これらの新しさを強調する主張は、正しい階級的立場によって導かれ、正しい戦術をもって補足されるならば、それぞれ情勢の重要な一面を表しており、それ故にかなりの大衆をひきつけているのであるが、このような抽象的な命題、一般的主張を、階級闘争の立場から離れて原則に高め単純に顫動スローガンへと転化するならば、そこから生み出される行動が、小ブル急進主義から最悪のセクト主義へと転落して行くことは理の当然である。

政治局声明は、関西の声明に対し「高校生活動家が政治的に代表するものと、……この沖縄集会が政治的に代表するものとを単に並列に論ずる」として、ここに「致命的誤り」を見ているが、むしろここにこそかれらのセクト主義が問題を理解し得ない「致命的」弱点を示しているのである。五月三一日の事件を通じて自己批判を含めて指摘せねばならないことは、それよりも、現実の闘争戦術においては、ブルジョワジーおよびその国家権力と改良主義やスターリニズムを同じく打倒対象として「単に並列に論ずる」ことはできないということである。

いわゆる前進派（中核派）および革マル派の「反帝・反スターリニズム」という「戦略（？）スローガン」に対するわれわれの批判の立場が、根本においてこの点にあったということを今さらくり返すことはないであろう。

（四）

なおもう一度、内部ゲバルトの問題にふれておこう。

声明はいう「われわれはイデオロギーおよび理論闘争を内部ゲバルトによっておきかえることに絶対に反対する。」

労働運動内部においてわれわれが必要な理論闘争を放棄してその代わりに暴力に訴えることに反対するということは、当然のことであり全く異議はない。

しかしイデオロギー闘争、理論闘争とはケツして革命運動や労働運動内部に限られるものではない。一般にマルクス主義者は、エンゲルスの述べたように、プロレタリアートの

階級闘争の形態として理論的方面、政治的方面、実際的経済的方面の三つの形態と任務を認めている。理論闘争とは、要するに主としてブルジョワ的・小ブルジョワ的イデオロギーとの闘争であって、この闘争は当然のことながら政治闘争、経済闘争と並んで関連しつつ発展さるべきものであって、単に内部ゲバルトによっておきかえられるべきでないばかりでなく、敵階級との公然たる暴力による闘争によってさえ必ずしもおきかえることのできないものである。それは敵階級との大衆闘争、その暴力的形態とさえ平衡して進むことは可能であり、進まねばならないものである。

元来「具体的な大衆闘争が自身を防衛する」ということは、この闘争が階級闘争である限り階級敵の攻撃から防衛するということであり、必要に応じてこの実力による自衛は発動されて暴力の形態をとらねばならない。すなわち、この労働者の自衛の暴力は本来敵階級に向けられているものであって、何ら「内部ゲバルト」の問題ではない。

しかしながら、現実に闘争が尖鋭化する時、あるいは困難な事態に陥った時、この暴力的攻撃は、時として昨日まで労働運動内部にあった勢力によって敵への屈服裏切り、敵への加担の結果として闘争に対して加えられる。われわれはこの攻撃に対してももちろん実力をもって自衛し反撃せねばならない。この場合明らかに労働運動内部における諸傾向間の闘争はすでに階級間の闘争の一部へと転化する。しかしながらこうした転化は、闘争の具体的情勢の中でおこるのでって、こうした衝突が敵階級との暴力衝突の一部か「内部ゲバルト」かということをこまかく詮議することはほとんどほ無益である。いえることは、もちろんこうした暴力を全面的に避けることは不可能であるばかりでなく、一般に革命の決定的な情勢に至るまでに、プロレタリアート内部からブルジョワジーの影響下の勢力を一掃することは極めて困難である以上むしろくり返し起こり得ると考えるべきである。

東大闘争において、共産党、民青の勢力が反動的な暴力をふるったという事実から一般的に彼らを「武装反革命集団」に転落したとしてスターリニストの支配する集団に内部ゲバルトをもって突撃するような傾向さえ現れたが、かような行動は決して合理化され得ない。特に今日、労働運動主力の多数が改良主義者とスターリニストの影響下にある以上、なおさらそうである。このような一揆主義的傾向は、たち上がった大衆を混乱に導きその自覚を妨げるだけでなく自らの隊伍自体を堕落へと導く。今日全国的に拡がる広範な大衆による大学闘争の中で、他方でおよそ不可解な幾多のリンチや無益な破壊行動が報じられている時、このような傾向に眼を閉じることは絶対に正しくない。

労働者がそのストライキ闘争を自衛するためにピケット・ラインを組む時、このピケッ

トは単に官僚や右翼の暴力に対する防衛であるばかりでなく、しばしば自己の仲間の中からの脱落者によるストライキ破りに対する防壁でもある。もちろん、この場合階級内部の対立の階級間の対立への移行はしばしば起こる。三池闘争の一定の段階において三池労組を分裂させた第二組合の一団は、「生産再開」を叫んで三池労組のピケットに対し突撃を試みた。（一九六〇年三月）。かの「穏健」である筈の新労のメンバーがである。このスト破りに対し当然のことながら三池の労働者は実力をもってこれを撃退した。この事件は一見「穏健」にみえる第二組合の本質を暴露したものであったが、だからといってこのことから長期の苦しい闘争に耐えきれず動揺し屈服した第二組合のメンバーに対する闘争の形態はもはやゲバルト以外にないなどという結論は決して出て来ないし誰もそのように考えはしなかった。ましてそのことから民社党ー全労の傾向には今や実力でもってのみ闘われねばならないというような考えは問題にもならなかったであろう。そしてこの英雄的な三池労働者の闘争においてさえ分裂を招いた一因には、自己の隊列の指導部、特に炭労、総評指導部における誤った方針があり、われわれが当時それをくり返し批判したことを諸君は決して忘れていないであろう。

要するに、具体的情勢において不可避的に必要とされる自衛のための敵に対するゲバルトの闘争と、不必要で誤った回避すべき内部ゲバルトとを分かつ基準は、依然として階級的利益と階級内部の労働者民主主義の擁護以外にはない。他の潮流からあえてしかけられる「内部ゲバルト」に対する防衛のための闘争もその基準から判断されるべきである。一般に内部ゲバルトが横行しその中にまき込まれる時、これに対する闘争は単なる「内部ゲバルト」反対の原則ではなくて、闘争をこのような袋小路と堕落へ導きつつあるこれら諸派の政治方針や理論に対する闘争をもって闘争の水準をひきあげることによって大衆を覚醒させることが必要である。われわれは今後一層そのために力をつくすであろう。